ほほづき

もうすぐお彼岸　「ひがん花」の咲くころだ

「ひがん花」と言うとなんとなくお線香くさいが

「天くじゃりゃげ」というと今ストーリーがそ

ようでちがったイメージがわく

秋が深まると「ひがん花」が多くなった　実に

そって両側に並んで咲いていた　くきがすで

て来て花が咲く　花形が放射ではなかなかよ

い形だ　ぐうの根に美しさで引きつけられが

たくさん咲くとその色がなかなかだう

近所の奥様がほしいと言うので母にかわって

さし上げた　すると又家から出ていういて

もろう　母がいいというのでいそいでかってき

て上げた　家のすみのホトケさまにでもいけた

のかもしれない　その奥さまはもろいか

ひがん花をみるとその名を思い出すが秋が深

まる「ひがん花」はこころりーとでうつく

さいている　ひかりなどなあいかみど秋が深

まると枯れる

苦から変化しないおりがある

菊の葉脈だけのもので美しい　たかにとって

そうたがどこかへ行ってしまった
たろうしそうたものはいつのまにか空となって
しまう。残念でしかたない
ほんものでも同じように出来ないかと思い
ほしずきを買って来てもらおう
高価な風鈴をを水につける　くさらず、よ
うに水を何回もとりかえる　そして風鈴
をよく見て観賞する　まつと鈴だけの保
ちもろうなず中の実はそのまんま
すると風鈴おきのようちくの所に残る
それをお線香にそえたい　線香より安く
あって美しいはず